

# 2005 年 ISAF 年次総会 報告 <カウンスル>

国際委員会  
大谷 たかを

## ISAF の直面している問題

2005 年 7 月に世界中の IOC 委員が集まり、2012 年（ロンドン大会）オリンピックでの<競技種目の見なおし>の会議がもたれ、日本にメダルをもたらしてくれたソフトボールと野球が競技種目からはずれ、ラグビーを始めとする 5 競技の内の 2 競技が入ることになったのはまだ記憶に新しい。この見直しは 4 年ごとに行われ、50 を超えるスポーツがオリンピックでの競技種目入りをねらっている。

セーリング競技は ISAF への加盟国の多さとその歴史でかろうじて残ったというのが現実であり、IOC 傘下の放送（TV）をつかさどる OBS (Olympic Broadcasting Service)からはセーリング競技の放映の難しさ、分かりにくさを強く指摘されている。オリンピックのTV 放映でライブとなるか、それともニュースなどでのハイライトとなるかの瀬戸際にあると言って良い。

そこで ISAF として 2008 年北京大会での<視聴者にわかりやすくエキサイティングなTV 放映>の実現に向けて

判りやすいレース方式、スコアリング、ルール

メディアに取材されやすい体制（メディアの教育を含む）というオリンピック競技種目に残るためにセーリングスポーツの根元を揺るがしかねない大きな改革が迫れた訳だ。関係する委員会に事前にワーキングパーティーが作られ、実際のテストイベントも行われ現場のセーラーやコーチの声をもとに今回結論に至ったのは「ファイナルレース（メダル決定レース）まで（49er は 15，その他のクラスは 10 レース）は捨てレース 1 本。ファイナルレースは捨てなしでダブルポイントでオンザウォーターダイレクトジャッジ方式」というもので、2006 年春からの世界中の主立ったオリンピッククラスイベントでのテスト運用がはじまる。

## その他の主なトピック

1. 各副会長からの部門別レポート
2. ISAF の 1005-2008 における目的と、その達成の為の委員選出
3. カウンスルに先立って開かれたイベント コミッティーからのレポート

オリンピックへのクオリファイ レガッタの見直し

2004 の J S A F からのサブミッションがもととなったこの問題はレガッタとしてはオリンピック直前の二つの世界選手権の結果をもとに<使われなかった国枠>が配分される方向でさらなる検討がおこなわれる

## 2007年ユースワールド(サンディエゴ)種目決定

男子	レーザー	29er	ボードはRS:X
女子	レーザーラジアル	29er	ボードはRS:X

4. イクイップメント委員会からのレポート  
RRS40.2 に定められたトラピース ハーネスの安全性に対する文言および適用時期の見直し。文言はそのまま適用は2009年1月1日まで延期される。
5. RS:X ボードについての現状レポート  
792隻がデリバリーされ、香港、韓国、スペインでRS:X イベントが行われた。バルセロナ大会では100を超えるエントリーとなって世界に幅広く受け入れられつつある。2006年のユースワールドから3年間のチャーターボード提供も決定。
6. 北京オリンピックの現地運営委員会からのレポート  
現場での工事を含め準備は順調に進んでいる。2006年のテストイベントでは、選手村以外使用。2005年12月には第2,3のウェザーブイも動き出す。
7. 会計報告  
ISAFの収入の3分の2はオリンピックからの収入であるのでオリンピックに残るか否かがISAFにとっていかに大切であるか。
8. 2012年のオリンピック種目  
2012の五輪種目について、7年前に決定したらどうかという提案があり否決はされたが、イベント委員会ではレーザー、レーザーラジアル、470男女が大きく支持された。
8. 2006ワールドセーリング ゲーム(オーストリア)からのレポートおよび同大会へのエントリー枠の決め方。
9. ジョージア、オースマン、セネガルのISAF加盟承認。
10. パンアメリカンセーリング連盟のISAF加盟
11. 2007年はISAFの100周年に当たる。9月1日2日、<世界中のヨットを海に浮かべる作戦>の計画。日本でも大作戦展開の必要あり。
12. 次回のミーティングは、11/2 - 12 ヘルシンキ。  
ミッドイヤーミーティングは5/5 - 7 ベルリン

今年のISAF年次総会は日本と並びアジアのセーリング界のリーダーシップをとるシンガポールで現ISAF副会長TPロー氏の総指揮のもとに開催された。今回は日本からもJSAF山崎会長が参加、ISA、ORCおよびアジアのリーダー達と多くの意見を交わすことが出来た事はアジアにとって、また日本にとって大きな前進であった。